

## 虚実とりまぜた誇張癖 (後編)

私「あのさあゝ‥‥こないだ釣り場でハックル巻いてないウーリー・バツガー拾てんけど、メチャ釣れてん!‥‥あれ無いん?」

マ「ああゝ‥‥リーチや!‥‥完成品はないわ!‥‥そろそろ自分で巻いてみようゝ‥‥」

私「俺に巻けてえゝ‥‥ほな、あのバイスっっちゃう奴、買わなあかんやん!‥‥また高おつくんちゃうん?」

マ「まあ、そやけど考えて見いゝ‥‥自分こないだからフライ(完成品)なんぼ買あゝたあ?‥‥どこまで続けるかしらんけど?‥‥結局、割高でもったいないでえゝ」

しかし、マスターが鎮座する目前のショーケースに陳列されたバイスなどは、とても高価で手が出せる代物ではない‥‥

私「‥‥バイスって、そんな高いのでんおゝてもっと安いのあるん?」

私の問いを察した様に、私が問いかけている最中に立ちあがり、マテリアルが陳列されたショーケースから小箱を取り出してカウンターの上に乗せた。

マ「これなら二千円や!‥‥まあ、最初だけで直ぐに嫌になって買い換えるやろから、手始めにコシでやって見いゝ‥‥」

その様におっしゃると、ポピンホルダーに黒のスレッドとワックス、そしてヘッドセメントにニードル、加えてポドキンとウィップフィニッシュャーをカウンターの上に並べて‥‥

マ「リーチやったら、これだけの小道具で巻けるわ!‥‥とおっしゃった。私「これだけって?‥‥こんなに要るん?」

すると、マスター得意の講釈が始まる。わかった様なわかん様な‥‥私「‥‥(完璧)予算オーバーやし!‥‥フライ買うより高いやん!」

マ「最初はそら(金)掛るやろお(笑)‥‥」

私「この糸(スレッド)で何個巻けるん?」

マ「腐るほど巻けるわ!‥‥使い切るんは根性入れて巻かなアカン(笑)‥‥再び、あれやこれやと講釈が続く‥‥

マ「‥‥で、ブラック・リーチやったらマテリアルはこんだけやな!‥‥と小袋入りのマテリアルが並べられた。

真つ黒のマラブーに黒のシェニール、そして巻き込むシンカーである鉛線が加えられる。

マ「そらや!‥‥フックは最初は#10にしとくか?‥‥#12も居るか?‥‥ひとり言の様におっしゃると、マスタッドの小袋が加えられた。

このマスターの一連の動きを遮らなかつた手前、今更購入しない訳にも行かず、言われるがまま包んでもらい精算して店を出た。

後はマスターの講釈を思い出しながら初めてのタイミングにトライするのみである。

早速、自宅に戻ってブラックリーチを巻いて見る。

少々歪な姿ながらも目出度く第一号を手に出た。

「なんや!‥‥結構、簡単やん!」

当然リーチだけでは飽き足らず、モンタナやウーリー・バツガーも克服すべく、即刻マスターの店に舞い戻って報告がたらに次なる相談‥‥

すると、待ちかまえて居た様に数色のシェニールにハックルプライヤーと小袋入りのハックルが差し出される。

斯くして、不細工ながらもブラック・モンタナやウーリー・バツガーマでもが、次々とフライボックスに詰められて行った。

この時の興奮は今でも鮮明に記憶の中にある。

それまでとはとても難しいと感じていた「毛鉤巻き」が、専用の小道具を用いると意図も簡単に毛鉤が出来上がる。この「表」に出れば魚釣り‥‥家

の中では「プラモデル」と言う小学生時代の懐かしい感覚が再来し、「アウトドアではフライフィッシング、インドアではフライティング」と、益々憑かれた様にこの釣りに夢中になって行った。

そしてその年の溪流シーズンを迎え、本格的に溪流ドライフライにトライする直前で前編に示したフライボックス珍騒動に遭遇し、それ以降はマスターの講釈に反論と賛同を繰り返しながら益々この釣りに情熱が注がれていった。

その頃になると、なかなか高価な物品には手を出さないが、変わった小物には興味を惹く私の性格をマスターはしっかりと心得ていた。

ドライフライのハックルに関して、メッツやホフマンと言う米国鶏の値を見て躊躇する私に、インド鶏のハックルを差し出してはくれたが、種類は譲らずあの色この色と複数枚差し出される。

悪く言えば、夢中にある無知な私に対して、質より量の販促活動を実践されたのではなからうか?・・・とも察するが、良く言えば、夢中にある私に若かりし頃の「自分を彷彿とされながら、有する知識を漏らすと伝えない」と言う想いがあって、色々な物を紹介頂いたとも受け取れた。

毎度「虚実とりませた誇張癖」を持って繰り返られるマスターの講釈・・・確かに、毎回店を出る時に志萬田を差し出して、札が帰るか小銭だけかの釣銭と小物類を引き取る日々が続いたが、あの頃は毎日が楽しかった。

そして数か月が経過し、夢中になり過ぎて霧中を彷徨つ釣り人となり始めた頃には、訳の分らぬマテリアルや使う当てのないタイミングツールが、チップなロッドやバイスに不釣合な量で溢れかえっていた。

「ちよっと、考えなアカンなあ〜」

・・・そう気付いたものの、時既に遅しである。

それでも懲りずに「マスターの店」に通い込む日々が続いたが、浪費癖を反省して買いを抑えたが為か、それとも一通り小物を売りつくして勧め物なくなつた為か、何とか物珍しさに対する好奇心も小康し、漸く自分の判断で物品を選別できる様に成り始めていた。

ある時、珍しく良質のエルクヘアが入荷したとのことで、マスターにその場で巻いてもらうことになった。

何時もなら、背後の陳列台に置かれた格式高い舶来物のバイスを寸借する様に私物化し、ヘッドの角度やジョーの幅を勿体ぶって調整してから巻き始めるマスターであったが、この日は簡単なバイスを取り出してカウンターの隅に固定したと思いきや、即刻フックを挟みこんでサッサと巻きあげてしまった。

このバイス・・・カウンターの隅に固定した時点でポールに溶接されたヘッドにより角度は一定、ジョーの幅も糞もなく、レバーを回転させてネジをゆるめるとバルタン星人のハサミの如くジョーがパカッと開き、フックを挟んでレバーを回転させるとネジ式に締まってフックは微動だにしない単純な構造である。





適当に巻きあげたエルクヘアカデイスをパツと外してひっくり返し、パツと固定してヘッドセメントを一滴垂らしておしまい・・・  
マ「こんな感じじゃなーこの毛先が素晴らしいやろー！」

出来あがったエルクヘア・カデイスに絶賛の論議を繰り広げた後、それ以上に気になったこのバイスについて問いかけてみた。

私「ところで、そのバイス・・・何？・・・それエエやんーあんなに（格式高い舶来物のバイス）高おないんちゃうん？」

マ「3000円ぐらいかな！・・・そやけどこれ、売りモンちゃうでー！」

私「なんでえ？・・・それでエエから売ってえ？やー！」

マ「それは勘弁して！・・・滅多に手に入らんバイスなんやー！」

そしていつもの講釈が始まった。

但し、このマスター・・・何分「虚実とりまぜた誇張癖」を差し引いて受け止めなければならぬ・・・この辺りの勘案は読まれる方に委ねるとして、その時に伝えられたことを要約すると次の様になる。

・一般流通品ではなくプロタイヤーが使用するバイスである。

・プロタイヤーといってもパターンを考案する様な著名なタイヤーではなく、コマーシャルフライを巻く職人さん向けのバイスである。

・職人さんは内職のオバ様方で食卓の隅で家事の合間に巻ける必要がある。

・従って、コンパクトな形状と生産スピードが向上する無駄を省いた効率重視のバイスである。



マ「普通趣味でフライやるモンは味気のおくて避ける！（笑）・・・アンタはやっぱりこっち（格式高い舶来物のバイス）やろお（笑）」

私「いや！・・・これエエやん！・・・これ譲ってえ？な！」

マ「見せるんやなかった！・・・わかった、そのまま言うならその代りに・・・そう言っただけカウンターの下を物色すると、おもむろに小さな箱を取り出された。

マ「これ買おうときー！」

私「何それ？」

マ「ハックルフライヤーや！・・・職人の手作りやで」

私「？？・・・バイスは？」

マ「まあ、出世払いや！・・・何時かはこの辺りのん（格式高い舶来物のバイス）買おうてや！・・・それまで貸しとったるわー！」

そして今度は因縁白く付きのハックルプライヤーに関して、マスターの講釈が始まった。

当然、「虚実とりませた誇張癖」を勘案してお読み頂きたい。

・一年程前、ある常連客に頼まれて発注したが、その後全く連絡がつかずデッドストックになってしまった。

・そこらにあるハックルプライヤーとは別格の職人による手作りである。

・良質の真鍮の棒を叩いて加工し、綿密に捲えて機械では出せない微妙な精度で作られている。

・これを使用すれば（ハックルの）すっぽ抜けは絶対にない。

・一生使えて絶対に飽きの来ない逸品である。

マ「悪いこと言わへんさかいー買おうときー絶対後悔せえへん！」

私「ナンボなん？」

マ「ホンマは8千円やけど、5千円でエエわー！」

私「はあ？ご・5千円って？・・・こないだ買おうたん5百円ぐらいと違おたっけ？」

マ「職人の手作りや言ってる

やろ！比べるモンとちや

うー！」

私「・・・ま、そろそろやけど」

マ「自分な！いっぺんエエ道

具使おてみい！・・・商売で

勧めてるんちゃうで！・・・

アンタの為に勧めてるん

やー！」

再々度、マスターの講釈が始まった。

・確かにロッドは舶来（オービス等）でなくともスーパーバルサーで充分である。

・リールは性能的には国産（カンタータヤスミス）が勝っているので知名度の拘りがなければ舶来物は必要ない。

・バイスも毛鉤生産の実用面だけを追及すれば、今日見せた職人向けで全く不自由やストレスを感じない。

・商売抜きに本音で言っと・・・この様に国産で充分だが、このハックルプライヤーは本音で言っても絶対にお勧めである。

マ「絶対損せえへんから、買おうときてー減多にないことやしー！」私「・・・」

マ「しやらない！・・・このワシが使おてるハックルもサービスしとったるわ！（笑）」

そう言つとマスターがいつも毛鉤を巻くために使用していた米国鶏のグリスリーとブラウンを私の前に差し出した。



マ「まだ、半分以上は残ってるさかい・・・いっぺんこのハックルでこのハックルプライヤー使おて巻いて見い！」

私「・・・」

終始無言で口を突いて出る言葉もなかったが、件のハックルプライヤーよりもマスターが目の前で使ったバイスと中古のハックルが手に入ることで嬉しさが顔に現れていたのかもしれない・・・マスターは話しながら精算作業を始めた。

マ「はい・・・絶対工毛鉤巻けるぞ！」

精算して店を出ると、すっかり陽が落ちて雨が降っていた。

(うっそお・・・何時間おったんや！)

斯くして、このバイスと中古のハックルは画期的に私のタイピング熱を上昇させ、使用する全てのフライが私の手で作られる様になって行った。

その後、タイングツールや小物の衝動買いは小康したもの、一通りの物品が揃うと今度は再びロッドに舞い戻る。

すると、待ってましたの如くマスターの講釈が繰り広げられる。

相変わらず「虚説くりませた誇張辯」は留まるどころを知らず、一方で判っていないながらも見事に感化されて支払を済ませる日々・・・

気が付くとマスターお勧めのスーパーパルサーを購入する傍らで、マスターの講釈を裏切る様に他店で手に入れたロッド達が幅を利かせはじめ、あれだけ熱中したルアー釣りは何時しか過去の通過点となっていた。

やがて、結婚して家庭の生活を支える身となれば、当然浪費は許されるものではない。

マスターもその辺りは心得ていて、今までの様に講釈の押し売りをする事はなくなった。

しかし、心の底に件のバイスが引掛かっていた。

(そろそろバイス買おくて、あれ返さんとアカンなあ・・・)

ところが、翌年に子供も出来てマスターの店どころか、この釣り自体に割ける時間も少なくなり、「マスターの店」にも二ヶ月に一度ぐらい立ち寄って帰る様な状態であった。

ある日、泡銭が転がり込み、勇んでマスターの店に向いた。

私「今日は久しぶりに奮発や！」

マ「おっ・・・どうとうこの辺り(格式高い舶来物のバイス)買っ気いゝになったか！」

私「(やっぱり)そおくるかあ・・・

いや、もうちょい待って！」

マ「ほならリールやな？カウンタータ

か？マリエットか？」

私「(ちやうちやう！・・・あれ！)

そつ言っってロッドを指差した。

マ「(バンブー)買おてくれるんか？」

私「(ホンマ)自由出度いおっさんや！(ちやう、その下、セフンイシブン！)



ニンマリと嬉しそうに微笑むマスター……  
マ「やっぱり結局こないなんねん!」(笑)……  
私「確かにない!」

マ「やっぱりオービスになるやろあ!」

ところが、このロッドは既に他文で述べた様に、直後に盗難と言いつ最悪の出来事に遭遇し、マスターに相談を持ちかけて困窮させる悩みの種となつてしまった。

それ以降、マスターは私に対してあれこれと勧めることはしなくなり、件のバイスにも全く触れようとはされなかった。

つまり、「講釈売り付け」の対象外となっていたのかもしれない。

それどころか、訪れる入門者に対して「講釈売り付け」の営業活動に加担させられる【桜】の様な扱ひも受けた。

マ「……どこで聞かはったか知らんけど#3だけでは無理! #3と#5の2セットは要りませ! ……なあ自分! どない思う?」

私「どこで釣らはんのお? 北田原? 芥川?」

客「ああ……そこらです。溪流もやってみるつもりですもん……」

マ「#3だけやったらシンドイなあ?」

私「8フィートの#4で行けるんちゃう?」

マ「……」

客「やっぱり#3だけでは無理ですか?」

私「一本やったら8フィートの#4でD.Tのフローティング、余裕があったらマスターお勧めがベストちゃう?」

マ「ほれえ……そこから……あのお……」

私(相変わらず講釈好きやなあ……最初から2セット揃える金持ちやったら、いちいち相談せえへんし! ……気持ちよおく#3売ったらエ

エねん……そのうち勝手に#4か#5欲しい! ……って言うて来るわ! ……)

漸く人に頼らず自立してこの趣味を嗜む身の上となり、マスターからも

免許皆伝を頂いた気がしていた。

しかしこれに反して、「マスターの店は段々と終焉の方向に向かい始めていた。

ある時、店の階段に向かって歩道を歩いていると、一階で営んでいた釣具屋がコンビニに様変わりしていた。

(なんや? 一階は止めたんか?)

マスターに訳を聞こうと階段を駆け上がり、戸口を開けた途端……ビツクリする様な光景が目に見え込んでいた。

天井の到る所から吊下げられた商品……

しかも、釣具には違いないがへら鮎釣りの魚籠や鮎釣りの引船、磯足袋に天秤重り等々……本業のルアーやフライを上回る量が溢れかえっている。

もはや消防法も何処吹く風で熱帯ジャングルの如く、通路もない様な状態で陳列されていた。

私「どないしたん?」

マ「下(一階)が止めよってな! タダ同

然で引き取ったんや! ……まだ

まだ売りモンになるさかい!」(笑)「

とても落ち着ける雰囲気ではなく、早々に退散することにした。

階段を下りると戸口に何か書いてある。

「戸口上がった二階……海、淡水、釣具あります。格安セール実施中!」

「何い暴走しとんねん! ……あのおヤ

ジ! ……大丈夫かいな!」



実際、大丈夫ではなかった。

この暴走した状況は客層と客層を一変させてしまった。

それまでは純粹にルアーやフライに没頭する客人達が入れ替わり立ち替わりの状況であったが、熱帯シヤングルとなってからは一階にあった釣具屋の客人達が格安品を漁りに階段を上り始め、当時小学生までに普及したルアー釣りの影響を受けて、山積み格安ルアーを求める自転車小僧どもでこった返す店となって行った。

私「5Xのリーダーは？」

マ「まだあるやろ？ないかあ？」

2週間後に訪れても品切れの状況・・・

よくよく観察すると、ルアーとフライは売れ筋の商品が消え、デッドストックが目立つ状況になっている。

私「リーダーまだ入らへんの？」

マ「イーアン最近手に入らへんよあ〜になってなあ・・・」

その頃になるとリーダーやフックも量販店で扱われる様になっていて、ルアー程ではないまでもフライもある程度は認知される釣りとなっている。

更に、もはやデッドストックの吹き溜まりとなってしまった「マスターの店」は時代から取り残された感が否めなくなり、私も心齋橋で見つけたフライショップに浮気する様になっていて、その店ではもはや初心者向けのレールが剥げ落ちてそれなりの知識有りが前提となった客人の扱いを受けていた。

それでも、この「マスターの店」には・・・他の店では手に入らなくなった売れ残りであるマスターのフックを自当てに時々訪れてはいた。

色褪せて変色してしまったORVISのベスト・・・

油が滲み出て茶色になった台紙をまとうホフマンのハックル・・・

毎度同じ商品の経年変化を垣間見る度に、もはや終焉に向かう店への淋しさが感じ取れた。

私「9842（マスターのアップアイ）・・・結局、ワシがコツコツ買い切っ

てもあ〜たなあ（笑）」

マ「ああ〜・・・もう無くなったかあ？・・・今フックはガマカツかティムコヤろあ？」

私「置かへんの？」

マ「・・・フライ用品はやっぱりしんどい！・・・商売にならんわ！・・・フライのお客さんも減ったし！（笑）」

私「ワシ・・・近々転勤することになってん！・・・そやし、2年ぐらい来られへんわ！」

マ「どこに？」

私「鳥取！」

マ「大山のイワナ釣りできるやん！」

私「鳥取（市内やんかい）・・・千代川か岸田（川）やわ！」

その時も前から借りっぱなしのバイスが気になって仕方なかった。

明確に「くれてやる！」とも言わず、「返せ！」とも言わないマスター・・・

店が終焉に近いことを感じながらも借りっぱなしで買い替えを後回しにする私・・・

この日もいつも通り、何の思いもなく店を出て階段を降りたが、その後二度この階段を上がることはなかった。

右も左もわからぬ状況で縁が深まり、済崩しの様に疎遠になってしまったマスター……

確かにこの店に注ぎ込んだ浪費は半端ではなく、一時期はやり込められた思いもあった。

しかし、一応は彼のお陰でフライフィッシングを趣味とする方々の一端に混ぜ込んでもらうことが出来たのも事実である。

やがて時が経つにつれ、「やり込められた」と言う想いは薄れ……

懐かしさと感謝が胸中で芽生えた頃には、この店は既に影も形もなくなっていた。

それからマスターから借りっぱなしのバイスで……

「毛鉤を巻いて川に行く」と言う日々が続いたのである。

完



あとがき

鳥取に転勤して2年後に帰阪したものの、この店はもはや眼中になく、更に2〜3年が経過した。

そして、気が付くとすっかりこの釣具屋辺りの雰囲気が一変して昔の面影がなくなっていた。

その間も、件の借りっぱなしバイスは巻で絶賛されるダイナキングやシンゼンティなどの銘品に見向きもせず、私のフライタイングを支え続けた。

辞、同、後任となってバトンを渡されたのはこのバイスのロンセットを扱は継ぐ様なタイプのマーニエットのCTVである。

つまりは、「バイスも毛鉤生産の実用面だけを追及すれば、今日見せた職人向けで全く不自由やストレスを感じない。」とおっしゃったマスターの講釈をそのまま裏付けるスタイルで今日までやってきている。



一方、職人の手作りと言語された件のハックルプライヤーであるが、コイツは正直申して騙されたのかもしれない。

その後、類似品を何度か他の店で見かけたが、どれもこれも数百円程度の代物であった。

当然、その程度の物と解ればあれこれと新種を試してみたくなり、その後も気を惹くものが現れると買っては試し、その時は即座に納得して新入りに切り替える決心をする。

・・・にもかかわらず、気付くとこの「職人の手作り」を使用している状況が幾度となく続いた。

理由は何故だか分らない。

確かにマスターが言われた通り、ハックルがすっぽ抜けた経験は未だ一度もないが、自重がかなりあってハックルが切れやすいとも感じている。

・・・であれば、本当にコイツが別格なのか？・・・と言う懐疑心が後押し、物は試しに安価な類似品を購入して使ってみた事もある。

確かに、使い心地は殆ど変わらなかったが、マスターが豪語された本家「職人の手作り」と平行して使用したにもかかわらず、2年程でハックルのすっぽ抜けが多発し、遂に真鍮にも張りが無くなって使用に耐えなくなり廃棄した経験がある。

・・・で、結局コイツでハックルを巻いているのが現状である。

斯くして、入門当初から未だに第一線の現役で使用している唯一の道具となって今日を迎えている。

つまりは、「一生使えて絶対に飽きの来ない逸品である。」とごっしょったマスターの講釈をそのまま裏付けることになってしまっている。

そして現在、他人様には「職人の手作りと言語されて購入したハックルプライヤー」と笑い話で盛り上がるが、内心はマスターの言われた事を信じているかもしれない。

私自身、「これより機能的に優れる」と感じる物は色々あったが、「手に馴染む」と言う点ではこのハックルプライヤーを越える代物には巡り合えて居ない。

おそろしく、これからはずっと・・・経年で付着する青錆を洗浄しながら使い続けるであろう。





そして不思議な事に、このバイスとハックルプライヤーと同時に、マスターから貰い受けたハックルも、ハゲハゲになった状態で未だ手元にある。当然、この後、何枚ものハックルが使い切られて目前を通過して行ったにもかかわらず、この最初の2枚だけは捨てられない。そして毎年、巻き貯めシーズンに微量ながらこのハックルからニール材を取ることにしている。

その度に・・・

「ハックルプライヤーや！・・・職人の手作りやで」

・・・と水戸黄門の印籠の如く勿体ぶって差し出したマスターの笑顔が思い出される。

今になって思うことだが・・・

マスターの「虚実とりませた誇張癖」とは、あさはかな私の偏見だったのかも知れない。



ところでマスター・・・  
確かにあのハックルプライヤー・・・一生使える職人の手作りでした。  
今でもしっかり使ってます。  
借りっぱなしのバイスはこの際、頂いておへんことにします。  
本当に色々ありがとうございます。

2010年 初秋